どうして彼女は二度……

宇礼シーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうして彼女は二度……

【Ｎコード】
Ｎ１１８９Ｊ

【作者名】
宇礼シーナ

【あらすじ】
ほらほら、ホラー・カムズ・ヒア。

２０１０／１／１０　タイトルを変更しました。

-1-

暗闇に一条の光が射す。冷たい光。
ああ、なんて寒いのかしら。胸の前で組んだ手を、ぎゅっと体に引き寄せた。
そのとき気付いた。わたし、裸……。そう思った女は自分の肌に触れ、ぞくっと身震いした。
なんで裸なの？
薄目を開ける。

いったい、ここは何処かしら。
女はほんの一瞬、夢と覚醒の狭間を行き来したが、あまりの寒さにはっきりと目覚めた。
真っ暗なのはともかく、なんか冷たい板の上に寝ているみたい。
敷布がないし、掛け布団もないのは何故なの？

目が慣れてきて、まわりが少し見えてきた。
頭の上の隙間から薄明かりが漏れている。
そこでやっと、自分が窮屈な箱の中に寝かされていることに気付く。
ぎょっとして起き上がる。
途端に頭をぶつけた。
「出して！」と、声にならない声を出す。

必死で手を伸ばし、明かりの射す隙間に指を入れた。
ぐんっと引くと、脳天をぶつけはしたが、箱ごと体が滑って何かの入れ物から出た感じがした。
何処なのここは？
いやいや、と僅かに首を振る。

余計なことを考えるのは後にしよう。
まずは一息付くことだわ。
今、体が求めているのは温もりだもの。
とりあえず何か着ないことには凍え死んでしまいそう。

氷みたいなタイルへ下りて、素足で踏みしめた。
そこで自分が引き出しのような棺桶から出てきたことが分かった。
寒さに歯をガチガチ鳴らしながら、手探りで壁に沿って歩いて行く。
戸棚にぶつかった。
良かった！
毛布があるわ！

女はそれに包まって部屋の一隅に腰を下ろした。
はあっと息を吐いた。
やがて少しづつ温まってくる。
強張った四肢に再び生命が通い始めた。
肉体が息を吹き返すようだし、同時に気力も息を吹き返した。
ふと、女は毛布の中の手で乳房を掴んでみた。
感じていた。
「夢じゃないわ」
両手を少しだけ毛布から出して頬にあてがって撫でた。
そしてそれを何度も繰り返した。
「夢じゃないわね」

気が変になった訳でもなさそうだ。
もともと若い頃から心臓には問題があった。
喘息もあったし……。
ストレスなんて人一倍。
でも太り過ぎ……太り過ぎで良かったかも。

さもなければ、この寒さでとっくに凍え死んでた。

女は習慣から腕時計を見ようとした。

時計はしていなかったが……なんでしょ、この妙な物は。

手首に何かくっ付いている。

浴槽の栓を繋いでおく鎖みたいなもの。

札も付いてる。

女は撫でてみてから目の前にそれを持ってきた。

暗がりに目を凝らした。

『田之上　智子』

自分の名だと分かったが、同時に求めていた答えも得たような気がした。

ここは霊安室？

たぶん病院の霊安室。

先ほどから何となく、そんな気がしていた。

――わたし、死んだんだ。

いや、実際には死んじゃいないけど。

だって死んでたら、こうして毛布に包まって、あれこれ考えたりしてる筈ないんだから。

だいぶ体が温まってきて、何故だか眠気が来たみたいで、智子の頭もぼんやりとして来た。

毛布から出ている足は相変わらず冷たいのに。

わたしは死んだ人間なんだ……。

夫や娘は今どうしているかしら。

笙美は夫の連れ子だけれど、中学へ上がる頃から大事に育てて来た。

わたしには子供が出来なかったから。

そう思っていると、智子はなんだか楽しくなって来た。
みんな、わたしが死んだと思ってるわけよね。
死亡時刻がそんなに前ってわけはない。
だって、ここに居たのも短い間のはず。
さもないと、わたしはとっくに凍死してるはずだもの。

智子は躍起になって思い出そうとした。
何をしてたんだっけ？
そうそう、誕生パーティー。
わたしの？
いえいえ、わたしは春先に三十七歳を祝ったばかり。
夫の五十三歳のパーティーだ。
ああ、そうだった。この別荘に知り合いを招いての食事会。
ええっと、夫がスピーチをするって言うので、前日から何度も原稿を推敲してたのは覚えている。
わたし、そのときからどうも気分が良くなかったのよね。
夫に悪いから我慢してたの。

呼吸困難。
それに、あの左肩に針を刺されるような痛み……。
でも時間は迫ってたし、とにかく忙しかった。
みんなの前で、テーブルに倒れ込んだんだっけ？
それとも夫のスピーチの最中？
もっと後だった。
庭先のプール。
プールの中に落ちたのは思い出した。
気を失いかけて、よろけて。

そうだ、みんながわたしの死を悼んでるはず。
夫や娘をさぞ悲しませたに違いない。

ここを出なくちゃ、と智子は思った。
なるべく早く、皆が居る別荘へ。
でも、どうやって？
死者への敬意ということからも、霊安室には鍵が掛かっているに違いない。

ドアを手探りしてノブを見つけ、回すと開けることができた。
外側からだけ鍵を開け閉めできる作りのようだが、とにかく良かった。
廊下へ出た。
廊下は生暖かかった。
体を包む毛布を掴んだ手が緩む。
ドアを静かに閉めるとき、再び手首の名札に気付く。
およそ自分でもやっていることの意味が分からないが、智子は名札をはずしてノブに掛けた。
だって、こんなもの持ち帰ったって記念にもならないでしょ。

突き当たりに洗濯室があったが、鍵は掛かっていない。
中には看護師の白衣。
そのひとつを選んで、ハンガーごと手元に引き寄せた。
そのときはずみで、肩から毛布が滑り落ちた。
見ると足元にはサンダルまであることが分かった。
壁に剥ぎ取り式のカレンダーを見付けたが、その横に大きな鏡があって、その中に三十七歳のちょっと太った女の裸体が写っていた。
それがなんだか不思議に思えた。
先ほどまでは死に掛けていた、いや死んでいた体なのだ。

カレンダーは夫の誕生日の翌日になっていた――きちんと捲られていればだが。
入り口の時計が刻む正確な音に気付いた。

針は十一時ちょっと前をさしていた。
再び廊下へ出て分かった。夜の十一時だ。
受付にいる夜勤の看護師は本を読み耽っていて、ちらっとこちらに目を向けただけだった。
すぐに本に目を落とした。
この時間、あの人の仕事は救急患者の受け入れだから、他の看護師がうろついていたからといって、細かい関心を持たなかったのかも知れない。
この病院が別荘の近くにあったことは不幸中の幸いだった、と智子は思った。
なんせ一文なしじゃ、バスにしろ、タクシーにしろ、手も足も出ないから。

六月の明るい夜とはいえ、夜風は湿っぽかった。
裏山の別荘地の方角から、フクロウの鳴き声が聞こえた。
隣の墓地に差し掛かったとき、智子は墓地の生垣の傍らに佇み、月と墓石を交互に眺めた。
危うく、あそこに入れられるところだったんだわ。
そのことを思い浮かべた途端、足はひとりでに速まった。
家ではみんな、さぞかし嘆き悲しんでいることだろう。
可哀相に……。
だから死ぬほどビックリさせないように、慎重な上にも慎重に出て行かないと。
なんといっても、墓を抜け出した幽霊くらいに思われるのが関の山なんだから。

-2-

別荘に着いた。
二階の窓はまだ煌々と灯りがついていた。
鍵を忘れたときのために、玄関脇の赤い植木鉢の裏にスペアキーを置いておくことにしていたが……。
あった、あった、ちゃんとあった。
たったそれだけの事なのに、今の智子には感慨がとりわけ深かった。
たった一日と数時間留守にしていただけなのに、浦島太郎の気分なのだから。

音を立てないように、そうっとドアを開けた。
玄関を爪先立ちで横切って、階段を上って行くと、中ほどにある踊り場付近で娘の声が聞こえて来た。
笙美――ああ、また娘の声が聞けるなんて！
部屋のドアは細く開いていて、暗い床に一筋の光が漏れ出ている。

「今さら、あの女が好きだった、みたいなフリしないでよ」
と笙美。
「あいつのせいで、あたしはあんなに嫌な思いをして来たのに！」

「ああ」
男友達の声。

「そうよ。義理の母親ってだけで、体裁のいいお飾りなのよ。例えれば、あんたの友達のクルマ、ポルシェとおんなじ。
ステータス・シンボルってだけのもの。あの女はクソよ。どうしようもないエゴイストのクソッタレだわ」

「おいおい」

「なによ！　あたしたちも他の人も踏み付けにして、自分だけ、やりたい放題じゃない。毎年、休暇は決まって此処に来てたけど、骨の髄まで冷え切ったわよ。
あいつはこの別荘がお気に入りだったからね。あたしはずっと海に行きたかったってのに。
事務所に後継者が必要だからって、否応なしにやりたくもない仕事やらされたし。
でも、それももうおしまい！　夢みたいだわ！　これで自分のスタジオが持てる。これからは音楽三昧よ！
資金ならふんだんにある。パパがあの女に保険をかけてたから。ああ、明日から何から手を付けたらいいんだろ！」

「でも、お母さんの事務所はどうなるんだ？」と彼氏。

「もちろん、パパが引き継ぐの。あの女が居なくなったから、ようやく手腕がふるえるって言ってたわ。経理の今日子さんとやっていくと思う……」

「笙美、さあ、お母さんのこと好きじゃなかったのか？　気付かなかったよ」

「憎んでた。十六で無理やり留学させられたときは、正直、殺してやろうかと思ったくらい」

「ふええ……オーバーだな」

「証拠、見せようか？」

引き出しを開ける音。
「何だよ、これ！　ナイフじゃないか」
「もうちょっとで、ほんとに刺してたわよ」
「まさかあ」
ひと呼吸置いて、
「あ、そろそろ帰るよ、俺」
「うん、またね」

智子は白衣を翻して隣の部屋に隠れた。
階段を下りていく足音、ドアの閉まる音が消えると静寂がのし掛かって来た。
ここじゃいったい、何がどうなってるの？
ん？　誰か呻いてる声がする？
智子はまた廊下に出た。
また聞こえる。
廊下の突き当たりの寝室から聞こえて来る。
まるで泣き声のよう。
奥の寝室ににじり寄り、ドアに耳をつけた。
女の声がはっきり聞こえるようになった。
「ああ……ああ、いいわ、止めないで！　もっと！　素敵よ！　あなた凄いわ！　愛してる」
驚いた、なんてものではなかった！
智子は肝を潰してドアから飛び退いた。

規則正しく聞こえる呼吸の音は雄弁だった。
女のあえぎ声と、それに感極まった夫の叫び……。

「今日子ぉ！」

ええ！？
あんまりだわ！
本来は自分の寝室だった、そのドアにもたれ掛かった智子は否も応もなく、夫が部下である経理の女と交わる声を聞かされた。
しかも、その貪欲なことといったら。
わたしのときとは雲泥の差ね。
まだ埋葬も済んでないっていうのに、もう……わたしの死を勝ち誇ったように祝っている。

そういうことだったの！？
真実を認識するには、一度死ななきゃならなかったってこと？
誰一人、わたしを愛してはいなかった。
それにしても……娘には憎まれてるし、夫は他の女を愛している。
しかも、わたしが死ぬのを待ってたんだ。

智子の心臓が喉元から飛び出しそうになる。
それにまた、左胸の性質（たち）の悪い痛みがぶり返す。
智子は再び死の影が迫って来ているのを感じた。
目が……眩む。
ここはもう、わたしの家じゃないんだわ。
憤激が、絶望が、そして怒りが……！
もう終わらせるしかないと思い至った。
再び襲う胸の痛みに、智子に突然すべき事が閃いた。

笙美が寝静まってから部屋に忍び込む。

引き出しからナイフを持ち出した。
廊下で白衣を脱ぐ。
素っ裸になったが、その必要があった。
夫と今日子がいる寝室に忍び込む。
二人が寝ている枕元に立ったとき、智子の存在に、最初に気付いたのは夫だった。
夫のあの顔！
全裸で立っている元妻の姿に気付いて、えも云われぬ表情で目を剥いた。
そこへ全体重を預けるようにして心臓を一突きした。

そして今日子の顔！
彼女は不穏な空気を察して目を開けたが、そこに全身返り血を浴びて立っている智子の顔を見て、どう思っただろうか。
いや、思う暇さえ与えなかった。
智子は今日子の上に馬乗りになり、豊満な乳房を揺らして、狙ったところを一突きにしたのだから。

あの二人は、突然目の前に現れた智子を見て、驚きの余り動きを封じられたかのようだった。
無抵抗のまま心臓を突き刺したのが、あのナイフなのだから、明日以降の笙美はとんでもない目に遭うことだろう。

その後、シャワーを浴びてから白衣を着なおし、台所へ行って睡眠薬を大量に飲んだ。

夜道を病院へ戻り、白衣を脱いで再度裸になり、サンダルも元どおり洗濯室に戻した。
霊安室へ戻る途中で、智子は「あっ」と言って鍵の存在を思い出した。

ドアに鍵が掛っていたら入れない。
だが近付いたとき、それは杞憂に終わった。
あの時ノブに掛けていた名札が、なんとドアの隙間に挟まれた状態で、鍵は掛かっていなかったのだ。

もし仮に鍵が掛っていたとしたら自分はどうしていただろう、と思うこともなく、智子は名札をはずして手首に戻し、再び棺桶に横たわった。
棺台の端を掴んで両手を伸ばすと、大きな引き出しはゆっくりと閉まった。
狭いが、気にはならなかった。
もう薬が効き始めていたのだ。
これで二度と目覚めることはあるまい。
でも、それでいい、と智子は思った。
少しばかり延命したところで、この命はそう長くは持たない。

どうして智子は二度死んだのか？
そんなことを気にかける者が現れるはずもない。
誰一人、この霊安室に真犯人が居たなどとは思いもよらないだろう。
なにしろ公（おおやけ）には、智子はあの二人が殺される一日前に死んだことになっているのだから。

遠くにサイレンの音を聞きながら、彼女は深く永い眠りについた。

-Ｈｏｒａ　Ｈｏｒａ，　ＨＯＲＲＯＲ　ＣＯＭＥＳ　ＨＥＲＥ-

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1189j/

どうして彼女は二度……

2010年10月8日15時08分発行